

朝

津守 真

朝、子どもが眼前にあらわれる前、緊張のひとつときがある。これからはじまろうとしている未知の時の前に立つおそれと、昨日まで考えてきて未解決のまま今に至っていることに対する懸念と。子どもを待つ現在は、この過去の先端に立って、開かれた未来を望み見ている。この緊張の時を純粹に保つことができた時、その人の中で、潜在的に充実した一日が始まっている。

この緊張の時を欠く日がある。郵便局に立ち寄ったり、客を接待したり、外的理由の場合には、それは間もなく回復できる。その緊張に耐えられずに、自分でその時を曖昧に

し、拡散させている日は、惰性に流される一日の始まりである。

朝のひとときには、子どもと大人の潜在エネルギーがかくされている。期待と希望を向けてくる子どもの新鮮なエネルギーを受けるには、大人は相当の覚悟を要する。その子どもたちとの間でひと仕事しようとする、生命的な精神力である。このことはどの一日も同様かもしれないが、子どもとの生活では尚更である。

しかし、逆に、大人には自分の消費するエネルギーを最小に済ませようとする自然の傾向もある。そちらに就くときには、子どもとの生活は疲れを増すばかりである。保育者としての自覚的意志がそれをくい止めねばならない。

今日の一日に向けるエネルギーが直接に子どもに向かって、子どもを大人自身の思いの中に取り込もうとするのは、保育者の陥り易い落とし穴ではないか。保育は他者が自ら育つのを助ける営みであって、子どもを自分の中にかこいこむのとは違う。

朝のひとときは、昨日までとは全く違うかもしれない一日を開く時である。今日、だれと出会うか、何事が起こるか、予想を超えたことに満ちている。そのことを無視して、大人の頭にある馴れた観念にとどまったら、新たな人とできごとに出会うことが困難にな

り、一日は、型にはまった、生命力の失せたものになる。昨日まで体を張って考えたことは大切にしながら、それは一時脇において、今日生まれ出ようとしている新しい一日に立ち向かいたいと思う。

朝は、昨日と明日、他者と自分等、相対する極の中間に立ってひとつにする、自我の力を甦らせる時である。

子どもがあらわれるや、朝の緊張は破られ、保育者はじきに子どもたちの中に巻きこまれる。昼は、実際生活の具体の中で、多くの要求や必要にこたえることをせまられるので、その中で身体を労する保育者には、本質的なことが見えなくなる時がある。何か欠けていることを感じながら、それが何であるかが分からぬもどかしさを抱きつつ、直接の必要に追われて過ごす。

本質という実体があるわけではないだろうが、本質的なものを求める気持ちがなくなったら、その保育は自己満足に陥るだろう。

保育には、理念も方針も、教材も方法も必要である。しかし、最も重要なのは人である。ひとりの保育者が、朝のひとときの緊張を生きるのをやめた時、複数のダイナミクスによって創られる保育の現場は、その分だけ墮落しはじめ。だれにもそうなる可能性

がある。それをひきとどめるのもまた、ひとりの人間の朝の覚悟である。他人のことを言えない、自分の課題である。

(愛育養護学校)

